

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	大門 碧
論文題目	アフリカ現代都市のショー・パフォーマンスにおける若者たちの社会関係—出会いの場としてのウガンダ・カンパラの「カリオキ」—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカの現代都市において若者たちがいかなる社会関係を形成しているのかを明らかにするために、娯楽として公演されるショー・パフォーマンスをめぐって展開する諸関係に関する記述と分析をおこなったものである。アフリカの都市住民の社会関係に焦点をあてた文化人類学的な先行研究は、なんらかの共同体を同定してその構造や編成原理を明らかにするのではなく、むしろ、ひとつひとつの出会いにおける人びとの行動や集まりの様相に注目する視点を提案してきた。この視座はポピュラー・カルチャー研究にとっても有効である。すなわち、特定のポピュラー・カルチャーに専心する人びとはなんらかの共通するアイデンティティや価値観をもつと想定するのではなく、出会いの場において人びとの行為や集まりがダイナミックに変化する様相を研究対象とするのである。本研究は、こうした理論的見地に立脚して、ウガンダの首都カンパラにおいて公演されているショー・パフォーマンス「カリオキ」をめぐる人びとの社会関係の記述と分析を試みたものである。カリオキは音楽を多用するエンターテイメントであり、2000年前後にカンパラで創出された。現在は、若者が形成するグループによって夜間にレストランやバーで公演されており、大衆的な人気を博している。</p> <p>第1章では、先行研究をレビューして上記の理論的立場を明確にした。第2章では、カリオキの概要を記述した。また、カリオキに対する観客の評価にはポジティブ／ネガティブの両面があり、一般の人びとにとってはカリオキが両義的な存在であることを指摘した。</p> <p>第3章では、カリオキが勃興してきた社会的背景とその歴史的な過程を記述した。1990年代のウガンダにおける政治的・社会的な安定と電子メディアの発展が、カリオキを誕生させる条件をととのえたこと、また、カリオキを創出した若者たちは、最初は娯楽としてパフォーマンスをしていたが、やがてビジネスの世界へ参入してパフォーマンスの内容を多様化させ、多くの新しいグループを結成したり、ほかのエンターテイメントに参画していったことを明らかにした。</p> <p>第4章では、カリオキのパフォーマーたちを周囲の人びとがどのように表象しているのかを分析し、人びとはパフォーマーたちにネガティブな印象をもちながらも、排除するような態度はとらないことを示した。</p> <p>第5章では、カリオキのパフォーマーたちの出身民族や教育歴、カリオキをおこなう動機、そして受けとる報酬が多様であることを明らかにした。また、かれらが公演のために形成しているグループのメンバー構成は流動的であり、パフォーマーたちはそれを常態とみなしていることを示した。</p> <p>第6章と第7章では、カリオキをおこなうときに見られるパフォーマーたちの相互行為を記述・分析した。第6章では、公演のために毎回準備されるプログラムの作成と公</p>			

演の実施過程を分析し、パフォーマーたちが、ある程度の計画をたてて新規メンバーにパフォーマンスの機会を与えると同時に、即興性を高めて新規メンバーが主体的にショーに参加することをうながす技法を駆使していることを明らかにした。第7章では、ほかのパフォーマーの道具や「ストローク」、そして歌がひんばんに借用されていることを示し、かれらが互いに融通無碍なかかわりをもちながらパフォーマンスを組み立てていることを明らかにした。

結論では、本論文をまとめ、カリオキをめぐる人びとの社会関係に考察をくわえた。カリオキのパフォーマーたちは、全体として輪郭が明確な集団を形成しているのではなく、個々の公演グループもまた、メンバーが常に変動している。かれらの社会関係の特質は、その場で即興的に出会って別れていくことを常態とするところにある。20世紀終盤から現在にかけて、サブカルチャーにあらわれる社会関係が高い流動性や柔軟性を帯びるようになったことが指摘されているが、カリオキもまた、その特徴を有している。